

## 日本労働年鑑 第25集 1953年版

The Labour Year Book of Japan 1953

## 第一部 労働者状態

## 第六編 農家の状態と農民の生活

## 第一章 農家及び農業労働者

## 第三節 土地および家畜・機械

## 一、経営土地面積

第一七六表「土地面積」によれば、一九五〇年二月一日現在で山林および農用地の総面積は一〇、二一三、一三九町であったが、二年後には一一、二七一、五二〇町と約一〇五万町以上の増加となっている。しかしこれは、本調査報告書も注意しているとおり、かならずしもそれだけ山林や耕地が現実的に拡張されたのではなく、報告された土地面積そのものがかなり不正確であり、一般に過少に報告されている。これは戦後のいちじるしい傾向である。一九五二年度の数字は、山林、農用地面積ともいずれも増加しているが、それは二年前のセンサスの数字より一層正確になったことを示すものであろう。

つぎに第一七七表「耕地面積」によれば、五二年では五、四四六、一九〇町で、これは二年前の世界農業センサスの数字五、〇九〇、五六七町に比べ約四四万町の増加となる。これは、さきに土地面積について一般的にのべたように、農家の過少申告の程度が近年減少したのが主たる原因であり、とくに五二年初めにおいては、麦の統制撤廃その他農村の社会経済的事情の変化にともない、農民の耕地面積申告がより正確になったからであろう。耕地面積は戦前は六〇〇万町前後の数字がつずいていたが、戦後には五〇〇万町を割る数字さえ現われ、五〇年の世界センサスまで大体五〇〇万町を上下した耕地面積が発表されてきたのであるが、今度の動態調査で戦後最高の五四四万町歩という数字が得られたのである。同報告書によれば、これでもなおいくぶん過少であると言うが、申告調査でもしだいに正確な数が得られるようになったことは事実である。

耕地のうち、水田面積は三、〇二九、九三〇町、これも世界センサスの数字よりは約一五万町歩増加している。統計調査部の推定によれば、この三〇三万町歩の水田面積も、他の方法より推算される水田面積より六万町歩ほど小さく、やはり過少申告の結果が出ているようである。

畑面積は二、一一〇、一六〇町、樹園地を合すると二、四一六、二六〇町歩で、五〇年世界農業センサスにおける二、二一四、六四三町より二〇万町歩ほど増加しているが、これもやはり実際の面積よりは過少であることは推定してまちがいない。

## 二、耕地の拡張と潰廃

一九五一年二月一日から一ヵ年間の耕地の動態を見ると(第一七八表)、拡張したもの四三、四九〇町歩、潰廃したもの二〇、六三〇町歩で、差引き二二、八六〇町歩増加した。これを田畑別に見ると田は七、三八〇町歩拡張したに反し、一〇、八五〇町歩潰廃し、結局三、四七〇町歩減少している。畑は拡張三六、一一〇町歩に対し潰廃九、七八〇町歩で差引き二六、三三〇町歩増加し

ている。これを、田畑変換面積を加算して観察すれば、結局田は二、九八〇町歩減少し、畑は二五、八四〇町歩増加したことになる。ちなみにこの傾向は前年度と同様である。

### 三、家畜

第一七九表によれば、五一年二月一日より一カ年間に、兎がわずかに減少したほかは、すべての家畜類は増加した。とくに乳用牛、めん羊、にわとりは大はばに増加している。乳用牛は二七万六千頭で前年にくらべ五万頭(二二%)の増加であり、過去の最高水準一九四四年の二六万五千頭を四%も突破した。

役肉用牛は二三九万五千頭で一カ年間で一万一千頭(七%)の増加である。これはすでに戦前の水準を抜いている。馬は一一一万二千頭で五%の増であるが、これは、戦前の水準にはまだ達していない。

めん羊は戦後急速に増加しはじめたもので五七万八千頭に達し、前年より一二万九千頭(二九%)増加している。山羊は五〇万一千頭で七%の増。つぎに豚は七九万九千頭で前年にくらべ七七%という大はば増加である。豚は価格変動の影響をうけてその頭数は急激に変化するのであるが、二六年度は価格上の好条件にめぐまれ豚の飼育増加となったものであろう。一般に家畜の増加は、農家の現金収入源の必要からとくに最近いちじるしい傾向となったが、官庁や農業団体の指導奨励などもそれを促進したと報告書はのべている。

### 四、農機具使用農家数

第一八〇表によれば、一九五一年二月一日から一カ年間の噴霧機、動力耕耘機、脱穀機の使用農家数の変化はつぎの通りである。

動力噴霧機の使用農家は五二年二月で三六万二千戸、これを一年前にくらべると二〇万戸以上、つまり二倍半に増加しているわけである。動力噴霧機は、とくに病虫害の共同防除に、共同的に使用されるもので、技術的のみならず社会的にも大きな意義をもちうるものであるが、これが一カ年に二倍半の増加をしめしたことは注目される。もっとも絶対数三六万戸は、全農家数から見ればまだ全く軽微であることはもちろんである。

動力耕耘機は八万四千戸で、これも前年から見ると二倍半以上の増加である。これらの新しい機械は戦後年を追うて急速に普及して来ている。ただしその絶対数はなおきわめて微少なことはさきにものべたとおりである。

動力脱穀機を使用した農家数は三二五万六千戸で、前年に比し七五万四千戸、三〇%の増で、人力脱穀機は逆に二%の減となっている。これは、同報告書ものべているように、従来人力機しか使用しなかった農家が、動力機を借用するかあるいは賃こきの形態で、併せ利用するという形が進行しているものと推定される。

日本労働年鑑 第25集 1953年版

発行 1952年11月15日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年8月10日公開開始

